
A.O.G -Agent Of God- ~ 真剣で代行者に恋しなさい！ ~

反省猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A・O・G - Agent Of God - 真剣で代行者に恋しなさい！〜

【Nコード】

N9214Y

【作者名】

反省猫

【あらすじ】

初めましての方は初めまして、知っている方はどうも反省猫です。色々思う事もあり、新たに書き直し+新しい話を書き足し、題名も少し変えました。という事で新しくなったA・O・Gをよろしくおねがいします。

この作品は真剣で私に恋しなさい！の二次創作小説です。

オリ主最強・チート・バグ・原作ブレイク・キャラ崩壊苦手な方にはおすすめできません。

それでもいよいようんがは 暇つぶしやんや

第1話 『神の代行者へエージェント』（前書き）

この作品は真剣で私に恋しなさい！の二次創作小説です。

オリ主最強・チート・バグ・原作ブレイク・キャラ崩壊苦手な方には
おすすめできません。

それでもいいよという方は、暇つぶしにどうぞ！

第1話 『神の代行者へエージェント』

なんでこうなった……

俺は今何もない真っ白な空間にいる。

そして目の前には俺と同じくらいの金色の長い髪に青い瞳の美しい女性がこちらに微笑んでいる。

さかのぼる事30分前……

（回想）

俺の名前は、てんじょう天錠 あきら暁

アニメとかゲームなどを愛するいわゆるオタクと言われる大学生だ。

前々からほしかったゲームを買って意気揚々と自宅に帰る途中、

少年達が集まって何かをやっていた。

俺は、少年達が集まっている隙間から覗くと少年達の中央に

服を着たうさぎのような変な生き物が少年達に虐められていた。

暁

「なんだ？ あの生き物は？」

俺は不思議に思いながらもなぜか見過ごせない感じがして、

少年達にちょうど持っていたカードゲームのレアカード数枚を

少年達に渡し、その不思議な生き物を助けた。

良く見ると左前脚を怪我していたので、とりあえず

家に連れて帰り、怪我の手当てをした。

すると驚くべき事が起きた。

??

「いやあ、助かりました。貴方は私の命の恩人です」

その助けたウサギもどきがしゃべり始めたのだ。

暁

「うお！　しゃ、しゃべった！」

俺は、突然の事で思わず腰を抜かした。

??

「あ、申し遅れました！　私^{わたくし}、神の従者^{いみな}をしております稲葉^{いなば}と申します」

そう言つて稲葉と名乗ったウサギもどきが丁寧にお辞儀をした。

俺もすぐに姿勢を正し

暁

「あ、これはご丁寧に、俺の名前は、天錠 暁です。よろしく」
そう言ってお辞儀を返した。

今、神の従者とか言ったか？ 暁は目の前の自称神の従者の稲葉を
じーと見ている。

稲葉

「それにしても、貴方は最近では珍しい奇特な方ですね。
大抵の人はそのまま素通りか、見ても見ぬ振りをしていましたの
に」

暁

「いや、俺はただ見過ごせなかっただけです」

暁は謙遜したが、本当は彼の過去にその理由があった。

彼は大切な人を目の前で亡くしたのだ。

稲葉

「御謙遜を。あなたは私を助け手当てまでしてくだされました。本当
に感謝いたします」

そう言ってお辞儀を下げた。

暁

「いや、当たり前的事ですから、頭を上げてください」
そついうと稲葉はじーっと品定めする様に暁を見ている。

暁
「な、何か？」

暁はその行為にたじろいだ。

稲葉

「ふむ、あなたならわが主に会わせてもいいかもしれません」

今、神と言ったか？ 神…… 神……

暁

「えええええ！！！！ マジですか？」

稲葉

「ふふふう、はい！ では行きますよ」

暁

「い、行くて、どこに？」

稲葉

「いわゆる天界というところですよ、では――」

暁

「ちょ、ちょっと！！ まだ心の準備が……！！」

稲葉

「いえ、善は急げと申しますから」

暁

「いやいやいや――」

稲葉

「ええい、往生際の悪い！ 行きます！」

暁

「うわぁー!!」

稲葉に右肩をタッチされた瞬間、1人と1匹はどこかへ転移した。

.....

.....

暁

「うん... ここは... どこだ？」

俺はどうやら気絶していたらしく、目が覚める真っ白い何も無い空間に横たわっていた。

??

「目は覚まされましたか？」

突然誰かからそう訊ねられ、俺はビクツとなり、声のした方向に目を向けた。

ちょうど自分の前方に一人の美しい女性が立っていた。

その傍らに稲葉も立っている。

暁

「貴方がもしや……」

??

「はい、申し遅れました第1級多世界管理者ルカ＝ツヴァイト＝ル
ミナスと申します。

いわゆる貴方達の世界の言葉で言うのならは【神】です」

そう言って微笑んだ。

……っと言った感じで回想終了。

暁

「貴方が神で名前がルカ＝ツヴァ……」

ルカ

「あ、ルカでいいですよ。 名前結構長いですし……」

暁

「じゃ、ルカさん。俺の名前は……」

ルカ

「天錠 暁さんですよ？ (ニコッ) 知ってますよ」

暁

「(赤面) / / /」

暁は、女性の免疫がない事はないが、どちらかと言えば苦手だ。

ルカ

「稲葉を助けて頂きありがとうございました」

そう言つて暁に頭を下げた。

暁

「あ、当たり前的事をただけですよ。お気になさらず（赤面）／／」

ルカは、じいーと上目使いで暁を見た。

暁

「う…… な、何でしょう？」

ルカ

「うふ、合格！」

暁

「……へ？」

暁は間抜けな声を上げた。

ルカ

「暁さん、単刀直入に申します。私の代わりに他のセカイを廻っていただけませんか？」

暁

「はあ？ セカイを廻るう？」

ルカ

「そのままの意味です。本来なら私が行かなければならないのですが、

今ここを離れるわけには行かないので、代わりに行ってくれる人を探していたんですよ」

そう言つて、ニツコリ微笑む。

暁

「で、でも、俺、何の能力もない普通のしがない大学生ですよ？」

ルカ

「それなら心配しなくても大丈夫ですよ。私が貴方に必要な能力を与えますよ」

それを聞いて暁は一瞬考えた。

能力がもらえる？

暁

「……その能力というのは、人を救えますか？」

その問いに一瞬キョトンとなったルカはすぐ笑みを浮かべ、

ルカ

「はい、救えますよ」

暁は過去の出来事を思い出していた。

暁は、大規模なテロで両親を失った。

その時思った俺にもつと力があれば大切な人を助けられたかもしれないと

暁は、真剣な表情になり、

暁

「そのお話お受けします」

ルカ

「それでは今から貴方は、私の代行者です」
エージェント

そして暁は神の代行者エージェントになった。

それからルカにこの依頼の詳しい内容を聞いた。

簡単に言うところだ。

俺は、他のセカイをただ廻るのではなく、

そのセカイで発生したイレギュラーを取り除く事。

そして、壊れた部分があれば修正する事。

この2つが大きな目的だ。

次にそのセカイで俺には役が与えられる。

その役をやりながらセカイでの任務を遂行する事になるのだ。

またその役の許容範囲なら何をしててもかまわないらしい。

ただし、人を殺すなどの事は禁止だ。

ちなみにそのセカイで協力者をいくら増やしてもOKらしい。

それを理解した上で頷いた。

ルカ

「次に貴方に授ける能力ですが、なんか希望がありますか？」

暁

「そうだなー 身体能力上昇にして修業とかすればそのまま反映されて強くなるかな。となる成長率限界突破。

それと初期の能力は、これから行くセカイの最強と同質な感じで後は、ありとあらゆる知識と技術」

ルカ

「ふむふむ、他には？」

暁

「毒とかの状態変化無効でそれと不死にしてもらえますか？」

後は、戦闘能力向上。魔力と氣両方無限状態で

そしてこれが一番の願いです。

アニメやゲームなどの必殺技や魔法とか使えるようにして下さい！」

ルカ

「ふむふむ、それじゃ希望したものと私からのプレゼントで創造の力と貴方の魅力を最大値にそれとこれはおまけです」

そういつてルカは目を瞑り、何やら呟いている。

ルカ
「我^{わが}…… 力…… かの者に…… 与えん!!」

ルカがそう言った瞬間、暁の全身が光り輝く

暁

「ッ……!!」

暁は、光が収まるまで目を瞑った。

そして光が収まるとルカが口を開いた。

ルカ

「ふう、今ので能力を付加しました。その証に」

そう言つとルカが指を鳴らすと暁の目の前に大きな姿見が出現した。

暁

「証? これって!?!」

暁は驚いた。顔は元々F ?のセイロス似のイケメンだったので変わってないが、

髪と瞳の色が変化していた。

髪は金髪、瞳の色は赤になっていた。

ルカ

「ふふ、それが代行者の証です」

ルカは微笑みながらそう言った。

暁

「これが代行者の証……」

暁がそうつぶやくと

ルカ

「では、早速ですがあるセカイに言っただきます」

その言葉に暁は、ルカに視線を向ける。

暁

「どのセカイにいくんですか？」

ルカ

「あなたに行ってもらうセカイは、【真剣で私に恋しなさい！】と似たセカイです」

暁

「へ？ まじこいに似たセカイって？」

ルカ

「はい、どうやらそのセカイに、イレギュラーが発生しているようです」

暁

「ふむ、わかりました。行きます！」

暁は気合いの入った声でそう言った。

ルカ

「ふふふ、ではゲート開きます」

ルカは、また目を瞑り何か呪文を唱えた。すると

暁の目の前に魔法陣が出現する。

暁

「これがゲート…… では、行ってきます」

ルカ

「はい、いつてらっしゃい」

ルカが笑顔で送り出してくれた。

暁は、ゲートの中に入りそして消えていった。

暁が行った後、

稲葉

「彼、連れてきた私が言うのもなんですが大丈夫ですかね」

その言葉にルカは笑みを浮かべ、

ルカ

「きつと大丈夫よ。だって彼は……」

その言葉に稲葉は驚くのだった。

b e c o n t i n u e d

t
o

第1話 『神の代行者へエージェント』 (後書き)

暁「おい、駄作者……」

作者「な、なんでしょう?」

暁「いきなり全部書き直すな〜!!」

作者「ご、ごめんなさい(TOT)」

暁「泣いてすむと思ってるのか、ああん(怒)
いままで読んで下さった方々に申し訳たたねえだろうが!」

作者「おっしゃる通りです>(――) <――」

ルカ「まあまあ、暁さんそこまでにしなさいな。
きつと何か理由があるんでしょう」

作者「ルカさん(涙)」

ルカ「キモいから近づかないでもらえます(笑顔)」

作者「ひ、ひどい」

暁「理由ね〜、何あるのか?」

作者「ありますよ〜色々と」

ルカ「色々とは?」

作者「まず、このP r o l o g u eだけど

セカイを廻る理由が詳しく書いてなかったり、
他にもルカの性格とかね。

自分で書いてて違和感がw」

ルカ「それで私の性格と言葉使いが前と変わっているのですか」

暁「そういえば、そうだな」

作者「それ以外にもいろいろあるので、修正するより

一から書き直したほうが早いと思ったので、

今回のような事になったのですよ」

暁・ルカ「なるほど」

作者「それとP r o l o g u eでまだ付け加えたい話もあるのも理由です」

暁・ルカ「ふむ、話は分かった。とりあえずまずは

読んでいただいた人達に謝罪をしなさい」

作者「はい……、今まで読んでくださいました方々

申し訳ありませんでした。A O Gは前よりももっといい
作品になるようにこれからも精進させていただきます」

作者「残りの話に着いても明日の夜もしくは明後日までには
書き上げたいと思います」

作者「これからも新しくなるA O Gをよろしく願います」

作者「では、次回 Prologue 第2話 【新しい家族】で

お会いしましょう！」

暁・ルカ「では次回までさようなら」

第2話 『新しい家族』（前書き）

神の代行者となった天錠 暁は、ゲートを通りまじこいのセカイへとやってきたが……

第2話 『新しい家族』

暁

「（ルカさん、一つ聞いていいか？）」「

暁は念話である質問をする。

ルカ

「（はい、なんでしょう？）」「

暁

「（なんで……！ 俺、子供になつてるのお……！）」「

そうなのである。

暁の姿はなぜか子供になっていた。

ルカ

「（それはですね、このセカイの役のせいです）」「

暁

「（このセカイでの役？ そういえばなんか説明でいったな）」「

ルカ

「（ええ、今回のこのセカイでの貴方の役は、風間ファミリーの
員及び先導者です）」「

暁

「（風間ファミリーの一員はわかるが、先導者とは？）」「

暁は、理解不能といった表情でルカに聞く

ルカ

「（風間ファミリーのみならず、その周りの人々も色々問題あるでしょう？）」

そう言われて、暁はゲームの内容を知っていた為か思い当たる点が多々あった。

暁

「（ふむふむ、それで？）」

ルカ

「（あなたには、彼らをいい方向に導いていただきます）」

暁

「（なっ！！）」

暁は絶句した。

オイオイ、まじかよ。

暁

「（俺がそんなこととしていいのか？）」

ルカ

「（ええ、お願いします）」

それを聞いて「はぁ」とため息をついた。

暁

「（かなり問題が山積みだが……やりがいがありそうだ！）」

暁は、口の端を上にあげ笑った。

ルカは、その答えを聞いて喜んでいいる感じだった。

暁はふとある事に気付いた。

暁

「（そういえば、俺はどこに住むんだ？）」

ルカ

「（それでしたら……）」

ルカから家の住所を聞き、最後に意味深な言葉を聞いた。

ルカ

「（ちなみにご自宅のほうにサプライズなプレゼント用意していますので……）」

暁

「（プレゼント？）」

ルカ

「（はい！　きっと気に入ってくれると思いますよ）」

そう言ってルカの念話が途絶えた。

暁は早速聞いた住所を頼りに今から住む我が家へと向かった。

暁

「聞いた住所だとこの辺だが……あつた！」

そこは、1人に住むには大きい西洋建築の屋敷だった。

暁

「間違つてないよな？」

屋敷をじいーと見ていると

玄関から一人のメイドがやってきた。

??

「暁様、お帰りなさいませ」

暁

「えーと、あなたは？」

??

「本日より暁様にお仕えさせていただきます【さえは冴場 りょうか涼香】と申します」

暁

「え？」

メイドさんが俺に仕える？

マジですか？

暁がポカーンとしていたら

涼香

「旦那様と奥様がお待ちです。どうぞこちらへ」

暁

「あ、はい」

涼香と名乗るメイドさんに案内され、

屋敷の中に入り、大広間の扉の前に着いた。

涼香さんは扉を開け、俺達は部屋の中に入る。

部屋の中に入った暁は自分の目の前にいる人物達に目を疑った。

暁

「父……さん…… 母……さん……」

そこには死んだはずの父親の天錠 総一と母親の天錠 結華が立っていたのだ。

総一

「暁、久しぶりだな」

父、総一はそう言い、

結華

「暁、元気だった？」

母、結華は微笑みながらそう言った。

暁は、わけが分からなかった。

二人はあのととき死んだはずだ。

暁

「な……ん……で……」

総一

「冴場君、席をはずしてくれないか？」

涼香

「はい、かしこまりました」

そついつて総一達に一礼し、涼香さんは部屋から出て行った。

それを確認して総一が口を開いた。

総一

「神様が、私達をこの世界に記憶のあるまま転生させてくれたんだ」

暁

「なっ！ 神様ってルカさんの事？」

その問いに二人は黙って頷いた。

暁

「い、一体どういう事？」

暁は混乱していた。

まったく意味が分からないと言った表情でそう言った。

総一

「それはなく、父さんと母さんが神の代行者とそのパートナーだからだ」

暁

「な、何イイイイイ!!!!!!」

部屋中に暁の驚く声が響いた。

ルカ

「……それは、私が説明しましょう」

突然、ルカの立体映像がそこに現れた。

暁

「ル、ルカさん!？」

ルカ

「暁さん、先程はどうも（ニコッ）」

いつもの笑顔でルカは言った。

そしてルカの表情は真剣な表情に変わり、

ルカ

「まず事の始まりは、あの大規模なテロです」

暁

「！」

ルカ

「実はあれはテロではありません」

暁

「テロじゃないって……」

暁は動揺を隠せなかった。

ルカ

「あれは、【敵】の仕業です」

暁

「【敵】？」

ルカ

「はい、私と対極の位置にいる者、名を【ネガ・マリス】」

暁

「ネガ・マリス……」

暁が敵の名を呟くと総一が、

総一

「ルカ、そこからは私が話そう」

暁

「父さん……」

暁は、父のほうに顔を向けた。

総一

「ネガ・マリスは、恨み・悪意などの人間の負の感情が集まった集合体が、神格化したものだ」

暁

「なっ！」

総一

「俺達は奴と戦い、奴を倒した。……そのはずだった！」

総一は、険しい表情になり、手を強く握った。

暁

「そのはずって……生きていたの？」

総一

「ああ」

総一

「そして、奴は関係ない人達を巻き込み、あの事件が起きた……」

暁

「……」

暁はあの時の事を思い出し、顔を下に向けた。

総一

「実はあのとき、お前も死んでいたんだ……」

暁

「ッ……！　なんだって……」

暁は驚きを隠せなかった。

俺はあの時死んでいた？

では、なぜ俺は生きてるんだ？

暁が考えていると

総一

「私達は、自分達の命を使い、巻き込まれた人達とお前を助けたんだ」

暁

「……」

じゃ、何かあ、

両親が死んだのは俺とその人達を助けたせいという事か？

暁は、呆然とした。

総一

「今、お前、自分のせいと思ったんじゃないだろうな」

総一は怒ったような顔でそう言った。

暁

「で、でも事実なんだろう？」

すると結華は近寄り、暁を抱擁し、頭を優しく撫でた。

結華

「貴方が気に病む事はないのよ。私達はあなたに生きてほしかったから……」

暁

「で、でも！」

暁がその続きを言おうとしたが、結華がその続きを言わせない。

結華

「暁、親というものはね、子供の為なら命を賭けて護るものなのよ」

暁

「母さん……」

母親は、小さい子供をあやす様に優しく頭を撫で続けた。

暁は、母親に撫でるのを止めてと手を出し、

真剣な表情で

暁

「話は分かったよ。俺がそのネガ・マリスを倒せばいいのか？」

ルカ

「いえ、今奴を倒す事は出来ないわ」

暁

「なぜ！」

暁は、声を荒げる。

総一

「奴は、負の集合体だ、人の負の感情が無くならない限り倒す事は不可能だ」

暁

「じゃ、何か父さん！ このまま指をくわえて見てろっていうのか！」

暁は、総一に詰め寄る。

総一

「そう熱くなるな、暁 絶対倒す方法はあるはずだ。今は、イレギュラーとバグの対応を優先するんだ」

それも聞いて、暁は納得してなかったものの

暁

「わかった……」

悔しい表情でそう答えた。

それから親子3人は、今までの事を話した。

暁

「そうか、父さん達はもう力があんまりないんだね」

父達は、あの事件で大半の力を使ってしまい、今では、

川神鉄心に劣るものの釈迦堂クラスの力は持っていた。

総一

「といっても弱くはないぞ」

結華

「ふふ、そうね」

暁

「じゃ、俺が何とかするしかないのか」

ルカ

「そうですね、このセカイでは暁さんが頼りです」

暁

「ん？　なんか気になる言葉を聞いたような……　このセカイではとは？」

ルカ

「ああ、それなんです、貴方のほかに神の代行者があと7人います」

暁

「……はい？ 俺入れて8人いるの？」

暁は軽く驚いている。

ルカ

「ふふ、はい」

微笑みながらそう答えた。

暁

「俺……正直いらなくない？」

ルカ

「いえ、他の方々も他のセカイで手いっぱいでしたので、それに暁さんの場合、代行者最強の総一さん達の力を
受け継いでますから」

軽い爆弾発言だ。

それで俺は選ばれたのか。

少しおかしいな～と思ったんだよ俺。

暁

「あれ～？ おかしいな～ 今変な事を聞いたような～」

暁はとぼけている。

総一

「事実だ。お前に俺と母さんの力を半分ずつやった」

暁

「まじですか？」

そう言つて、母を見ると微笑みながら頷いた。

暁

「だ、だけど今まで俺そんな力使えなかったけど……」

総一

「ああ、それはな。俺がルカに頼んで封印してもらってた」

暁

「オイ！」

暁は突っ込んだ。

ルカ

「力の封印なら能力を渡すときに解きましたよ？」

暁

「な、なんだって!!」

暁は今日だけで驚きの連続だった。

暁

「な、なんか驚きすぎて疲れた……」

総一

「あ、そうそうお前に一つ言い忘れてた」

暁

「もう大抵の事では驚かないよ、俺」

暁は疲れた顔でそう言った。

総一

「お前には妹がいます」

暁

「へ……？」

結華

「今年の春、生まれたのよ。名前は、【天錠てんじょう桜華おうか】」

暁

「俺に妹が……」

それを聞いて

暁

「これからは、また家族と暮らせるのか……俺？」

総一

「ああ」

結華

「ええ」

暁の目から涙がこぼれた。

それを慈愛の眼差しで見ていたル力は

ル力

「いいプレゼントだったでしょう?」

ル力のその問いに暁は涙を服の袖で拭き、元気な声で

暁

「ああ!」

こうして暁は、再び家族と暮らせるようになったのだった。

c o n t i n u e d

t
o
b
e

第2話 『新しい家族』（後書き）

作者「まさかの両親復活と妹の存在、いかがだったでしょうか？」

暁「俺も驚きまくって疲れたわ（――；）」

作者「そうはいつでも嬉しいでしょう？」

暁「ん、まあーな」

作者「テレてやんの」

暁「う、うるさい!!」

作者「とりあえず、主人公いじりはここまでにして」

暁「（作者、いつか滅する）」

作者「敵の存在が明らかになったね」

暁「ネガ・マリスだっけ？」

作者「そうそう」

暁「あれって、名前の由来あるの？」

作者「あれはね、負の英語訳のnegativeと悪意の英語訳のmaliciousと繋げただけ」

暁「結構単純なネーミングだな」

作者「それでもかなり強いよ」

暁「まじで？」

作者「まじで」

暁「……と、とりあえず次回予告を」

作者「あ、ごまかしたね」

暁「うつさい！」

作者「こほん……では、次回 第3話『業火の中で』でまたお会いしましょう！」

暁「では次回までさよなら」

第3話 『業火の中で』（前書き）

ということ、あの人物との物語です。

第3話 『業火の中で』

あれから4年の歳月が過ぎた……

ここはアメリカのLA。

今日は父に連れられ知人の会社の操業20周年の記念パーティーに行くことになった。

まさか、うちの父親の職業が、世界屈指の財閥、天錠コンツェルンの総帥とは……。

元いたセカイでも父親の商売の才能は群を抜いてたからな。

リムジンに乗り、40分後、会場のビルに着いた。

父親もキリツとした表情になり、営業用の顔になる。

俺も一応、大財閥の御曹司の為、キリツとした感じを出す。

会場に着くといろんな人達が、寄ってくる。

富豪A

「これはこれは、天錠さん、今日も凛々しくらっしゃる」

総一

「いえいえ、そんな事は」

婦人A

「またまた御謙遜を。あら？　こちらの子は？」

総一

「私の息子の暁です。暁、挨拶なさい」

そう促され、暁は人を魅了する微笑みで

暁

「天錠　暁です。父がお世話になってます」

婦人B

「あら、理髪そうなお子様ね、おほほほ」

暁

「（あー、やだやだ。この人達、わかりやすいおべっか使いやがって）」

暁は心の中で毒づいた。

そして、会場を見渡すと気になる少年を見つけた。

暁

「（銀色の髪のツンツン髪、あれはもしかして……）」

暁は、周りの人に「失礼」と言って抜けだし、その少年に近寄った。

暁

「あのすいません」

??

「ん？」

暁に呼びかけられてその少年がこちらの方を向いた。

暁

「私の名前は、天錠 暁と申します」

??

「おお！ 総一殿のご子息か！ わが名は、九鬼 英雄！」

暁

「（やっぱり……という事は、ここがあの事件の現場か……）」

英雄

「暁殿。どうかなされたか？」

暁

「いや、何でもありません。ところでどうも殿とか付けられるのは慣れてないので

私の事は、暁と呼び捨てでかまいません」

英雄

「暁殿がそう言うなら、これから暁と呼びましょう、それと我と話す時は、敬語でなくてもよい」

暁

「わかった。そのほうが助かる。どうもこういう場所は苦手で」

英雄

「フツハハ！！ 場数を踏めば、苦手も気にならなくなるよ」

暁

「そこまで慣れたくないんだが」

英雄

「貴校は、面白い人物のようだ。我と友になってくれぬか？」

そう言つて、英雄から手を前に出される。

暁

「ああ、喜んで！」

暁は前に出された手を握り返し握手をした。

ちょうどそのとき

ズドオオン！

何かが爆発したような音が会場全体に響き、入り口付近から煙が入ってくる。

婦人A

「キヤアアアア！！！！！」

婦人Aが悲鳴を上げる。

英雄

「な、何事だ！」

ズドオン！ ズドオン！ ズドオオン！ ……………

英雄がそう言った直後、連続して一斉に爆発音が鳴り響き大量の煙が会場に立ち込め、

爆発音がした部屋から炎が上がる。

暁

「この音は……爆弾か！」

英雄

「何イ！」

暁

「とりあえず、ここから脱出しよう」

英雄

「うむ」

そう言っ、英雄の左手を握り、走り出す。

出入り口付近には、人々が我先にと出入り口に殺到している。

そして、自分達がいる反対側から爆弾の爆発音がした

ズドオオン！

逃げ遅れた人が爆発に巻き込まれ、吹っ飛ばされる。

英雄

「人が……」

総一

「おい、暁！」

総一が二人に駆け寄ってくる。

暁

「父さん！ 英雄を頼む。俺は逃げ遅れた人を助けに行く！」

総一

「……わかった。必ず生きて帰ってこい！」

暁

「ああ！」

英雄

「無茶だ！ 暁は我と同じ子供ではないか！

総一殿はご自分のご子息が心配ではないのか！」

英雄は総一に抗議する。

総一

「あの子なら大丈夫だ……」

その理由を知らない英雄はその言葉に怒りを覚える。

英雄

「我也助けに行く！」

そう言つて、暁が向かった方向に走っていく！

総一

「あ、英雄君、待て！」

総一の制止を振り切り、英雄は暁の方へ進んで行く。

そのとき、前に進んでいた英雄の近くで爆弾が爆発した。

英雄

「ぐわゝ」

英雄は吹き飛ばされ、吹き飛ばされた場所に尖った瓦礫があり運悪く、

英雄の左肩と左腕に突き刺さる。

英雄

「ぐっ！！」

物凄い強烈な痛みを感じる。

そして最悪な事に他の部屋から発生した火災がこの会場まで燃え広がりが会場全体が火の海になった。

一方その頃、

暁は、吹き飛ばされた人々を救助し、ビルの外にでた。

暁

「父さん〜！ あれ英雄は？」

総一

「あれ？ 暁と一緒にしないのか？ 自分も助けに行くと
暁を追って行ったぞ」

暁

「なんだって！ なんで止めなかったんだ！」

総一

「止めたさ、しかし、会場にはいなかったし、
外に出たんじゃないかと思って探しに来たんだが」

その言葉を聞いて、暁は舌打ちし

暁

「チッ！ 俺探してくる！」

総一

「今、ビルの中は火の海だぞ。それにまだ爆弾があるかも知れんのだぞ！」

暁

「心配するな、俺を何者と思ってる」

その言葉を聞いて総一は小さく息を吐き、

総一

「フ、いらぬ心配だったな」

そして暁は再びビルの中に入って行ったのだった。

英雄 side

英雄

「ぐっ!!!」

左肩と左腕の傷と血が大量に出て、意識を持っていかれそうになったが、

英雄は、だらんとなった左腕を右手で押さえ、出口を目指す。

英雄の周辺は火が燃え盛り、炎の壁となって行く手を阻む。

英雄

「チィ！ 我は……こんなところで倒れるわけにはいかぬ！」

英雄には夢がある。

【世界一のプロ野球選手】という夢が…。

英雄

「我は絶対生きてここから出る！」

英雄は一步步を歩を進める。

ちょうど暁より先に救助に来ていた女性が一人

女性

「おい、だれがいるか！」

女性は生存者がいないか大声で呼びかける。

その声に英雄は、

英雄

「ここにいるぞ！　ここだ！」

女性

「！　あつちか！」

女性は目にもとまらぬ速さで英雄の所まで移動した。

女性

「大丈夫か！　酷い怪我じゃないか！」

英雄

「心配いらん！　ただのかすり傷だ」

女性

「嫌、どう見ても重傷じゃねーか。ホラ、肩を貸してやる、歩けるか？」

そう言って、女性は肩を貸した。

英雄

「かたじけない」

女性

「にしてもその怪我で良く動けたな」

英雄

「我には、夢がある。その夢の成就の為にここで死ぬわけにはいかぬ」

女性は驚いた。

まだ小学生のガキなのにここまで確固たる信念と気高さを持っているこの少年に

思わず、尊敬を覚えた。

英雄 side out

二人はようやく出口へとたどり着いた。

女性

「もう少しで出口だ。がんばれ！」

英雄

「ああ！」

出口に辿り着いた瞬間、部屋の上部が崩れ、大きい瓦礫が落ちてくる。

女性

「チィ！」

持っていた2本の小太刀を抜き、大きい瓦礫を目にも止まらぬ速さ

で切り裂いた。

しかし、続けて又別の瓦礫が複数上から落ちてきた。

女性

「対応が追い付かない！」

英雄

「ここまでか……無念！」

そう言っで、英雄は目を閉じる。

しかし、二人と瓦礫の間に誰かが立ちふさがった。

それは英雄が良く知る人物だった。

英雄

「あ……あ……暁！」

暁

「もう大丈夫だ！ 英雄」

そう言っで暁は、二人を担ぎあげ、光の如く、瞬く間にビルから脱出した。

そして、誰もいない公園の芝生の上に英雄を置いた。

女性

「お前は一体……」

暁

「ん？ 英雄のダチだ！（この女性は……）」

髪は長いが後に英雄の専属メイドとなる忍足 あずみだ。

たしかこの時期は、大佐（『君が主で執事が俺で』参照）の傭兵部隊にいたんだっけ？

暁

「こんな事をしてる場合じゃない」

英雄の怪我を見ると重症だった。

暁

「仕方ない、ここで応急処置をする」

あずみ

「応急処置だと？」

あずみは何言ってるんだこいつと言わんばかりに疑わしい目で暁を見た。

暁はそれを気にする事無く何もない空間から医療機器を出した。

あずみ

「な！ 一体どこから出した」

暁

「細かい事は気にするな！ 英雄、麻酔なしでやるからじっとしてろよ」

英雄

「つむ……」

暁

「（こいつはやばいな、意識を失いかけている。血も結構出てたかな）」

そう思いながら、鮮やかな手際で傷の手当てをした。

英雄

「ぐああああ……!!」

英雄の左腕と左肩に凄まじい激痛が走る。

数分後、応急処置は完了した。

あずみは信じられないとばかりにあっけにとられていた。

暁

「（このままだと野球ができなくなりそうだな。仕方ない、あれを使うか）」

暁は、左腕の傷口に手を当て、

暁

「治癒巧！」

そう言った瞬間、暁の手から緑色の気を出し左腕に送り込む。

あずみ

「な！ 氣だと！」

英雄

「これは！」

あずみと英雄は驚いた。

小学生くらいの少年がセカイでも使える者が少ない、氣を使っているのだ。

驚かない方がおかしい。

左腕に氣を送り込むのが終わると次に左肩に氣を送り込んだ。

数分後

英雄

「礼を言う、暁。お前は命の恩人だ」

英雄は暁にお礼を言った。

暁

「よしてくれ、友達を救うのは当たり前だろ？」

それに礼を言うならこの人にもお礼を言ってくれ」

英雄

「そうであつたな、救助の方、礼を言う」

あずみ

「礼には及ばないよ、任務だからな。それよりそのガキ、お前一体何者だ？」

暁は、その言葉にニイと口の端を吊り上げ、

「俺の名前は天錠 暁、英雄の友人で代行者^{エージェント}さ」

あずみ

「天錠…… そうか、お前が天錠コンツェルンの！」

暁

「そういうとき、あずみさん」

あずみ

「！」

あずみが小太刀を構える。

あずみ

「なぜ、私の名前を」

暁

「それは、大佐さんと知り合いだからさ」

あずみ

「なるほどね、たしかにお前の親父さんと大佐は友人関係だから、私の名前を知っていても不思議じゃないか」

そう言うにあずみは小太刀を収めた。

暁

「うんじゃ、あずみさん。英雄を病院に連れて行ってやってくれ」

そう言つて、暁は父のいる方向へ歩き出す。

あずみ

「ああ、わかった」

英雄

「暁！ また会えるか？」

その問いに

暁

「ああ！ また会えるさ！」

暁は背を向けたままそう答えた。

後日、

英雄の怪我の具合を聞いた所、

左肩と左腕ともに問題なく順調に回復し野球もできるみたいだ。

よかったよかった。

後から聞いた話だが、英雄の怪我の治療をした先生が、

医者

「こんなに見事な応急処置を私は見た事がない」

と褒めてたらしい。

さて、そろそろ風間ファミリーのメンバー達と接触する為、日本に移動しますか。

t o b e c o n t i n u e d

第3話 『業火の中で』（後書き）

作者「ということで、英雄とあずみ登場でした」

暁「やっとまじこいのキャラがでてきたよ」

作者「まあね」

暁「でもこの話を書いたってことは…… Prologueはこれで終わりか？」

作者「ああ、そうだよ次から第1章、やっと主要メンバーできます」

暁「おお！」

作者「あと、技とか人物とかはまたあとで紹介したいと思います」

暁「ふむふむ」

作者「ということで次回、第1章 第1話 『風間 翔一と直江 大和』でまた会いましょう」

暁「では次回までまたな」

第1話 『風間 翔一と直江 大和』（前書き）

ということで、風間ファミリー初期メンバーの二人の登場です。

第1話 『風間 翔一と直江 大和』

両親と別れ、俺は冴場 涼香さんを含む12名のメイド達と

LAから日本へと引越した。

目的地は川神市。

今度住む場所は、将来【チャイルドパレス】が立つ土地をうちが買取り、

屋敷を建てた。

それは俺の決意の表れだった。

暁

「（絶対、冬馬達を救ってみせる！）」

引越しの片付けも一段落し、俺は行動を起こすことにした。

暁

「涼香さん　ちょっと出かけてくれるね」

涼香

「お一人ですか？　最近物騒ですから、誰か護衛を付けましょうか？」

暁

「んーまあ、一応大丈夫だけど、誰か付けてもらえる？」

涼香

「それでは、来夏にお願いしましょう。来夏」

涼香が呼ぶとメイド　No.2の南雲なくも　来夏らいかが一瞬にして現れた。

来夏

「呼びましたか、涼香？」

涼香

「ええ、暁様の護衛をお願い」

来夏

「了解しました。暁様、では参りましょう」

暁

「ああ、お願いね、来夏さん」

暁が微笑みながらそう言った。

来夏は、少し頬を赤く染めて、

「こほん、では、参りましょう／＼」

そう言っつて瞬く間にまたその場から消えた。

暁

「では、いつてきます!」

涼香

「いつてらっしゃいませ」

涼香に見送られて暁は目的にの空き地を目指す。

15分後、

暁は目的地の空き地に着いた。

来夏さんも暁が呼べばすぐ跳んで行ける距離にいる。

暁は、空き地を見渡し、目的の建造物を見つけた。

それはダンボールで出来た俗に言うダンボールハウスだった。

暁は、ダンボールハウスに近づき、少し開^あいているドアの隙間から中を覗いた。

すると中に暁と同じ歳のバンダナの少年が何かをしていた。

暁

「（あれがキャップか） 声をかけてみるか？」

そう思いながらドアを開けた。

翔一

「誰だ!」

暁

「ごめん、ちょうど散歩していたらこのダンボールが目に入って、これって君が一人で作ったの？」

翔一

「ああ、俺一人で作った！ それとこの名前は【風雲風間城2号】だ！」

暁

「2号？ 1号は？」

暁は首をかしげながら言った。

翔一

「作った次の日に行ったら知らないおっさんが住んでいたからあきらめた」

それを聞いて、暁は納得したような表情で

暁

「なるほどね」 にしても所々やばい箇所があるな」

翔一

「なんだと！ 俺の作ったのにケチをつけるのか！」

翔一は、自分が一生懸命作った物にケチをつけられ怒っている。

暁

「怒ったなら、謝るよ。俺ならこの城をもっと頑丈にできるよ」

翔一

「本当か！どうやるんだ？」

暁

「ああ、それはね……」

それから俺たちは、風間城の補強案について大いに語り合った。

翔一

「おまえ、いろんな事知ってるな、友達になつてくれないか？
俺この町に来たばかりだから友達いないんだ」

暁

「俺でよければ、喜んで。俺の名前は、天錠 暁だ」

翔一

「アキラだな。俺の名前は風間 翔一ってんだ！」

暁

「ならシヨウだな！ よろしくな！」

翔一

「ああ！」

そういつて、握手を交わした。

それからいろんな話をした。シヨウは、親父さんと旅から旅の生活を送っていたそうだ。

で、シヨウの親父さんが、そろそろ腰を下ろすことになり、この町

に引っ越してきたのだ。

翔一

「おまえ、天錠グループの総帥の子供なのか。すげーな！」

暁

「凄いのは、父さんのほうさ、俺が偉いわけじゃない」

翔一

「じゃ、将来親父さんの会社継ぐのか？」

暁

「将来、継ぎたいと思ってる」

翔一は、その答えを聞いて、

翔一

「そうなのか、じゃ、会社継ぎ前に一緒に旅にいかねえか？」

暁

「ははは！それもいいな。考えておくよ」

翔一

「楽しみだぜ！」

暁

「ああ！」

そう話していると外に誰かがいる気配を察知した。

暁 「（俺達と同じくらいの少年か。ここにきたという事は……大和か！）」

暁 「誰か外にいるみたいだ」

翔一 「ん、誰だ？ 出てみるか？」

暁 「ああ」

二人が外に出るとそこには、荷物を持ったニヒルな感じの少年が立っていた。

少年の名前は、直江 大和

話を聞くとどうやら家出をしてきたらしい。

大和 「俺は、母親がうるさいから家出したんだ。しかし、俺は冷静な子供だ。あまり遠くに行く俺の経歴に傷が付く」

暁 「お前、アホだろ？」

大和

「アホとはなんだ！」

あほと言われ、大和は怒っている。

暁

「アホはアホだ。冷静ならそんな事はしねえよ。

それに家出ならもつと遠くに行け。

母親に探してほしいのが丸わかりだ」

大和

「ぐっ……」

大和は、凶星を言われ黙った。

暁

「お前、人生は、死ぬまでの暇つぶしとか考えてねえよな？」

大和

『実際そうだろ？』

暁

「だから、お前はアホなのだ！ そんなこと考えてたら、人生かなり損するぞ」

大和

「何？」

暁

「いいか！ 人生というのは長いようで短い。

お前にも夢があるだろ？ それを叶えるためには並大抵の努力じゃないし、

夢によつては、専門の知識と経験も必要だ。

人生を死ぬまでの暇つぶしと言ってるやつは、その時間すら無駄にしている。

まず、その考えを捨てろ！ 後、そのニヒルな感じはキャラか？ はつきり言つて、お前に似合つてないしかなり痛いぞ。実際のお前はそんな奴じゃないだろう？」

大和は、自分がいままでカッコイイと思つていた事をかなり痛いと言われ、

自分の考えも否定された。

だが、不思議と怒りがこみ上げて来ない。

それは大和も無意識のうちに自分は間違っているんじゃないかという考えがあつた証だつた。

大和

「じゃ、どうすればいい……？」

大和が暁にそう訊ねると

暁

「夢の為な努力と労力を惜しむな！ 必要な知識も学べ！ ダメだつたときなんか考えるな！

常に前向いて進め！ そうすればいつかその夢に手が届く！」

その答えを聞いた大和は、

大和

「お前、名前は？」

暁

「俺の名前は、天錠 暁」

大和

「アキラ……俺をお前の弟子にしてくれ！」

暁

「弟子！？なんでまた？」

大和

「お前は、俺の知らない知識をたくさん持っている。それにお前が師匠なら俺の夢に近付ける気がする。」

暁

「夢？どんな夢だ？」

大和

「総理大臣になってこの日本を変えたいんだ！」

暁

「へえー、これまた大きな夢だな。半端な道のりじゃないぞ？」

大和

「覚悟してる。険しい道だと思うけど、どうしても俺はその夢をかなえたい！」

暁

「そうか……わかった。俺の弟子にしてやるよ」

大和

「ほ、本当か！　ありがとうございます。アキラ…いや師匠！」
なんか大和がうれしそうにそう言った。

翔一

「おまえも面白い奴だな！　俺は風間　翔一！　よろしくな！」

大和

「俺は、直江　大和。　直江　兼続の直江に大和魂の大和だ！」

暁

「大和か、よろしくな！」

暁は大和の前に手を差し出す。

大和

「これからよろしくお願いします師匠！そして翔一！」

大和は、暁の手を握り返し握手をした。

暁

「ああ！」

翔一

「おう！」

こうして俺は、その日のうちに友人と友人兼弟子を手に入れたのだ。
った。

e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.....

t
o
b

第1話 『風間 翔一と直江 大和』（後書き）

作者「という事で、キャップと大和登場の回でした」

暁「なんか大和、弟子になったぞ？」

作者「あーいいのいいの、大和のあの性格私嫌いだし、とりあえず、更生させないとねと思ったんで今回この話になりました」

暁「なるほどね、そういえば一子達は？」

リメイク前のやつでは、やつつけて感じてたけど？」

作者「それなら次の話でワン子・ガクト・モロの加入の話ですよ。まあやつぱ、やつつけじゃなく真面目に書いたほうがいいよ
うな気がしたしね」

暁「なるほどね」

作者「まあ、話長くなるから読んでくれる方には申し訳ないけどね」

暁「まあね」

作者「ということで、次回 第2話 『風間ファミリーのはじまり！』でまた会いましょう！」

暁「じゃ、次回までまたな！」

第2話 『風間ファミリーのはじまり!』 (前書き)

今回は、風間ファミリー結成時の残りのメンバーの加入話です。

第2話 『風間ファミリーのはじまり!』

風間ファミリーは3人からはじまった。

まず俺、天錠 暁と、風間 翔一、それから直江 大和。

あの出会いから良く遊ぶようになっていた。

リーダー気質のキャップと補佐気質の大和、それと両方を補佐する俺、

3人の相性がよかったんだろう。

翔一

「駄菓子屋いこーぜ。ピククリマンのキラあてんぞ」

大和

「カードの位置に法則があるんだ。新品の箱にしようぜ」

暁

「買うのはいいが、良く考えてから金使えよお前達」

キャップが俺達をリードする感じで楽しかったが、

二人が暴走しそうなときは俺が止めていた。

そんな俺達3人をじーっと見ていたのが岡本 一子。

のちに川神院に引き取られることになる女の子だ。

翔一

「お、なんだお前。俺達と一緒に遊ぶか？」

一子

「え……」

キャンプの良いところは、こういう風に

爽やかに人に手を伸ばすことだ。

一子

「うんっ！」

ワン子はうれしそうにその手をとった。

こうして、ワン子も俺達と遊ぶようになった。

一子

「女の子と遊ぶより大和達と遊んだほうが楽しいわ！」

俺達は、他愛もない会話をしていたときちょうどワン子の話題になった。

大和

「へー、今までは違うところにいたんだ」

一子

「うん、おばーちゃんがひきとってくれた」

ワン子は、孤児院からおばあさんに引き取られてここに引っ越してきたらしい。

ワン子の孤児院の話は面白かった。

一子

「それでね、リクオっていうやつが俺はコックになるって包丁いじっちゃって……」

大和

「お前のいた孤児院バイオレンスだなあ」

翔一

「ワン子泣き虫だからイジめられてたろ？」

一子

「タツちゃんがいるから平気だったよ」

源 忠勝、のちに風間ファミリー入りする漢である。

暁

「（それが原因で忠勝のやつは、一子に兄って感じでしか見てもらえないんだよね」

報われねなあ……）」

暁が忠勝の事を考え込んでいると

一子が暁に寄ってきて、

一子

「どうしたの？」

不思議そうに暁に聞いた。

暁は、すぐに何とも言えない表情から優しい表情になり、

暁

「いや、なんでもないよ（ニコッ）」

そう言って微笑みながら、優しくワン子の頭を撫でた。

ワン子は、子犬のように気持ちよさそうに目を細める。

翔一

「本当にワン子は犬みたいだなあ」

大和

「たしかに！」

そう言って、大和が笑う。

一子

「ん？」

ワン子はどうやらわかってないようだ。

暁

「（まあ、そこがかわいいんだけど）」

どうやら俺もワン子に甘いらしい。

俺は苦笑するのだった。

俺達4人はフリーダムなキャップとわんぱくなワン子、

それらの暴走をおさえる俺達、という感じでまとまっていた。

ワン子は元気ではあるが、よく泣いていた。

翔一

「いえーい！俺またうめえ棒当たりー！」

翔一は嬉々とした感じでそう言った。

一子

「なんでそんなにいっぱい辺りが出るのよう……」

大和

「あ、今回俺も当たった」

翔一

「俺と大和仲間ー。ワン子1人だけ仲間外れー！」

一子

「うわーん！ー！」

ワン子は大声で泣き出した。

暁

「俺もはずればっかだから、ワン子と同じはずれ仲間だ。

だから、泣くな」

本当は1回当たっていたが、ワン子にはだまっていた。

ワン子

「……本当？」

暁

「ああ！ だから泣くな」

それを聞いて、ワン子は服の袖で涙を拭き、

ワン子

「うん！」

そう言つて、笑顔を見せてくれた。

感のいい大和は、俺が本当は当たってたのを気付いてたみたいだが、

黙っててくれた。

俺達は何もするにも一緒だった。

商店街にやってくる知り合いの本屋の店長が声をかけてきた。

店長

「おお、お前ら元気のいい4人だなあ！」

そう言つて、

店長

「でも俺の店の前で遊ぶなバツキャロー！」

と怒られた。

翔一

「それー！　たいきゃーく！」

一子

「わー！　まってよー！」

大和

「お騒がせしましたー！」

暁

「本当にいつもすいません、今度また本買いにきますので！」

店長

「おう！　貴重なお得意様だからなおまえはでもまた店の前で遊んだら

承知しねーぞコンチクショウ！」

暁

「はい！」

そう返事をして、暁は店長に頭を下げ仲間の元に向かった。

店長はそれを見送って

店長

「あの風間つてのは悪ガキになりそうだが、それと天錠のほうは

あの歳でしっかりしてるなあ」

店長の人を見る目は確かだった。

岳人

「おいてめえ風間！ クラスの女子に少し
人気あるからって調子乗るなよ！」

浅黒の背の高い少年、島津 岳人がキャップに絡んできた。

翔一

「別にのってねーよ。お前が勝手に怒ってるんだろ」

キャップは呆れ顔でそう言った。

岳人

「けっ、覚悟しろ。ブッ飛ばしてパンツ脱がせて泣かせてやるぜ。ふへへへ！」

どこかの三下の悪党みたいな笑い方をしてそう言った。

翔一

「面白いな、喧嘩は負けた事ないぜ」

それを聞いてガクトは、

岳人

「そりゃ今までの相手が弱いからだ」

岳人がそう言うのとキャップは真面目な顔になり、

翔一

「いや、喧嘩売ったら死にそうな奴が仲間に居るんで……」

暁

「（そういえば、この前、DBのかめはめ波撃って見せたら、全員驚いていたな……）」

ガクトは、その言葉に首をかしげたが、

岳人

「ん？ 俺様は……強えぞ!!」

一子

「あわわわわ、あ、暁と大和どうしよう?」

曉

「心配するな。危なくなったら俺が止める」

そう言って、動揺しているワンスの頭を撫でる。

曉

「それにうちの軍師がなんとかするだろ」

暁は、大和を横目でちらりと見ると

大和

「（こういう手合いは策で八めるに限る）」

何か策を思いついたみたいだ。

大和

「……では喧嘩で勝負をきめようか。殴り合いだよ」

大和

「夕方5時に空き地にきな！ にげるんじゃねえぞ」

そうやって、ガクトを挑発する。

岳人

「面白い。上等じゃねえか、ひよろひよろ野郎」

そして決闘開始の夕方5時。

岳人

「ぐお！？　なんだこれ落とし穴！？」

岳人はまんまと罠に嵌った。

暁は、呆れていた。

暁

「策ってこれだったのか……　はあ」

暁がため息をついた。

大和は５時までには空き地に落とし穴を作成しておいた。

翔一

「いい眺めだな！　行くぜコラー！！」

岳人

「やめ、ちょ、おま！　ヒキョーだぞ！」

翔一は、落とし穴の上から岳人に蹴りまくった。

暁は無言で、翔一に傍に行き、

一子

「暁？」

暁は、キャップの首根っこを持って上にあげた。

翔一

「ちょ、暁、なにしゃがるー！」

大和

「そうだよ、師匠」

翔一と大和が抗議してきたが、一瞬二人を睨むと黙った。

暁は、ため息をつき、

暁

「たしかに自分より強い奴には策を用いるのは有効だ。
だが、相手一人に大勢でいたぶるのは、おかしくないか」

そう言うと、二人ともシュンとしている。

暁

「そこのお前もこれじゃ、嫌だろう？」

ガクトにそう言うと

岳人

「ああ！ 納得できねえ！」

それを聞いて

暁

「俺がこいつの相手をしよう……」

その言葉に

翔一・大和

「イイイイ！！！！」

キャップたちはガタガタ震えていた。

岳人は、その様子を不思議そうに見ていたが、

この後、なぜ彼らが震えていたのか知ることになる……

………

岳人を落とし穴から引き揚げてから

お互い正面になるように向きあい、

岳人

「お前が相手あ！ 俺は強えぞ！」

暁

「俺は、まあまあ強いぞ」

そう言って、喧嘩が始まった……

1分後、ガクトはブルブルと震えていた。

そして

岳人

「申し訳ありませんでした！！」

それはそれは綺麗な土下座だったという……。

それからあまりにも不公平なので、もう一度仕切り直し、

キャップと岳人にタイムンで決着を付けさせ、

お互いに認め合う所を見つけたよううで

そしてその結果　。

一子

「わわわ何か来たよ」

岳人

「よっ、今日から俺様達も遊びにまぜろよ」

岳人

「島津　岳人だ。んで、こいつもいれてくれ、ダチの」

卓也

「師岡　卓也、よろしくね」

翔一

「おう歓迎するぜ」

キャップは二人を歓迎した。

一子

「がるるっ！」

ワン子はなぜか岳人を威嚇する。

岳人

「なんだこの生き物は」

大和

「新入りに負けないうちを張ってるのさ」

岳人

「面白い生き物だ。よろしくなオイ」

卓也

「仲良くやろうね」

暁

「ああ、俺は、天錠 暁だ、よろしくな二人とも」

するとガクトは、暁の目の前に立ち、すぐさま土下座し、

岳人

「あんたの強さに惚れた。弟子にしてくれ！」

暁

「はい？」

こうして俺は、また新しい弟子が出来たのだった。

これで6人。

これが風間ファミリーの始まりだった……

c o n t i n u e d

t
o
b
e

第2話 『風間ファミリーのはじまり!』（後書き）

作者「ということで、題名変わってますが、気にしない方向で」

暁「気にするわ!」

作者「私少し勘違いしてたんですよ」

暁「勘違いとは?」

作者「原作で最初の5人のときに風間ファミリー結成したと思ってたんですが、

もう一度、やり直したら、百代と京入ってから後でした」

暁「ああ、だから結成じゃなくてのはじまりに変えたのか?」

作者「はい、そうです」

暁「そう言う事が」

作者「疑問に思われた読者の皆様申し訳ございません」

暁「これで俺入れて6人と言う事は次はあの人登場?」

作者「はい、そうなんです。あの子の登場です。

ということで、次回 第3話 『百代登場! 暁VS百代』で
またお会いしましょう!」

暁「次回までまたな〜!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9214y/>

A.O.G -Agent Of God- ~ 真剣で代行者に恋しなさい! ~

2011年11月29日20時50分発行